



写真-1 紀淡海峡に面した成ヶ島の海岸。遠くに友ヶ島が浮かぶ

team.虹鰓^{にじえら}の発足

team.虹鰓は、2019年8月に海の観察会のメンバーが中心となり、海洋プラスチックごみ問題について取り組むべく発足したプロジェクトチームです。以下は実施した主な活動です。

- ・観察会でのごみ拾い
- ・Noぺ割…観察会参加時に、繰り返し使用できる水筒を持参していただくことで参加費を割引
- ・啓発ポスター…「大阪自然史フェスティバル2019」にてNoぺ割のポスター掲示
- ・成ヶ島への遠征観察会実施

今回は、この内「成ヶ島への遠征観察会実施」を中心に報告させていただきます。

1.「大阪湾の宝島」成ヶ島とごみ問題

成ヶ島は、兵庫県洲本市由良港の沖に浮かぶ南北約2.5kmの細長い島です。瀬戸内海国立公園の一部でもあり、ハマボウやハマウツボなどの絶滅危惧種の植物やハクセンシオマネキなどの希少動物が生息する自然の宝庫です。

「大阪湾の宝島」と呼ばれる成ヶ島ですが、一方で、ごみが漂着する場所として深刻な問題を抱えています。紀淡海峡に面した砂浜の自然海岸であるため、海流に乗って大阪湾を回遊したプラスチックごみなどの生活ごみや粗大ごみなどが流れ着き、打ち上げられやすいという特徴があり、美観はもちろんのこと生態系を含む海岸の環境の悪化など、さまざまな影響を及ぼしているのです。

発泡スチロール、ペットボトル、ゴルフボール、プラスチック製のかご…変わったものだと位牌まであったそうですが、その大半は地元で出たごみではなく、どこからか流れ着いたものです。そして、どんなに掃除をして一時的にきれいにしたとしても、大阪湾のごみがなくなる限り、成ヶ島の漂着ごみがなくなることはありません。

この状況は、ややもすると宝島をごみの島と容易に変えてしまいます。今日の成ヶ島の姿は、「何とかしないと」と立ち上がった地元の有志の方々の、20年以上も続く努力の賜物といえるでしょう。

4稿 9/20



写真-2 ワークショップで拾ったごみについて説明を聞く



写真-3 拾った車輪

2.漂着ごみのワークショップ

今回の観察会は、みんなで袋いっぱいごみを拾うのではなく、ごみの専門家を招いて、

- ・成ヶ島に漂着したごみの特徴、どこからたどり着いたのか？
- ・漂着ごみと普通のごみとの違い
- ・成ヶ島にごみが漂着させないようにするためには？

といったことを考えてもらうワークショップ形式にしました。

【理由】

- ・海ごみは、塩分・水分・砂などを含むため、ごみの状況によっては焼却炉を損傷する恐れがある。陸で拾うごみに比べて処理が困難で、リサイクルも難しいことが多い。
- ・拾ったごみはどこかの処理施設で最終処分をする必要がある。産業廃棄物となると、民間の廃棄物処理業者に処分等をお願いする必要がある。
- ・洲本市の処理施設の処理能力、成ヶ島からの運搬の問題。
- ・拾った数や量ではなく、漂流したごみについて考えたり専門家の意見を聞く「気づき」が重要。

3.ごみワークショップ実施結果

●7/5 (日)

- ・ライターや中身の入ったペットボトルが多くあった。拾ってはいけないなんて…。
- ・プラスチック製のおもちゃやボールなどが見つかった。
- ・注射器を見つけた。危ない。
- ・古いテレビの基盤が見つかった。

●8/22 (土)

- ・海外から流れてきたごみが目に付いた。
- ・漁具がとても多いと感じた。
- ・ボールやペットボトルごみが目立った。軽いので運ばれやすいのだと考える。
- ・ベビーカーについていたと思われる車輪を見つけた。

班に分かれて話し合っている時に、ごみの専門家である有限会社エビオ（兵庫県尼崎市）の仁保めぐみ社長が巡回して解説をしてくださったので、ただ拾っただけでなく、ごみについて色々学んだり考えたりすることができました。

見つかったベビーカーの車輪につ

いては、「車輪はどっちだろう？金具なんて燃えないよね？」と班のみんなで話し合っって『燃えないごみ』に分類したのですが、仁保社長から「これは『燃えるごみ』にお願いします！」と言われ、参加者の方は非常に驚いていた様子でした。『燃えるごみ』というより『燃やすごみ』であると聞き、出す側でなく処理をする側のことを初めて知った方もおられ、ごみの出し方について考える大変良い機会になったと思われま

また、テレビの基盤については、「もったいない！売れるのに。…ここまでの状態になるともう無理だけど…」と仰っていました。基盤には金や銀、パラジウムなどの希少金属が含まれていることがあり、それを取り出すことでリサイクルができますが、海水に浸されてしまったが故にどうすることもできません。海に捨てられなければ、希少金属は回収してリサイクルできたと考えられます。少なくとも成ヶ島を汚す一因にはならなかったでしょう。



写真-4 気になったごみを見つける。制限時間5分



写真-5 海浜植物



写真-6 Noペ割ポスター



写真-7 ツアー開催チラシ

4.費用と処分

中身の入ったペットボトルは、中身の成分を調べて処分する必要があるということをご存知でしたでしょうか？逆に言うと、中身が何であるか判別できないと処分できないのです。私はteam.虹鰓の活動を始めるまでそういった視点で考えたことがなく、ただ自治体の指定するごみの出し方に沿うことのみでした。

ごみの処理工程を「回収」→「分別」→「運搬」→「処分」と分けると、中身の入ったペットボトルは、例えば「回収」しても、成分を調べてもらえる専門家をお願いするしかありません。危険物や有害物質、医療系廃棄物なども同様です。ライター、カセットボンベ、注射器…成ヶ島の海岸でよく見かけるこれらのごみは、拾ったとしても誰かに託すしかありませんが、それは即ち費

用の発生へとつながります。専門家ってどこ？どうやって連絡を取るの？誰が費用を負担して？地元で出たごみでもないのに？

落ちているごみを回収することは美化や地域環境の保全のために非常に重要なことです。自治体の指定する形でごみを分別することも大事です。ですが、私たちは分別したごみが、それぞれの種類によって、焼却されたり原料やエネルギーとしてリサイクルされたり、最終処分場で埋め立てたりすることを理解していても、そのごみが運搬された後の処分や費用のことまで考えてはなかったのではないかと思います。

自治体が責任をもって処分しているということは税金によってまかなわれているということです。例えば、「空のペットボトル」ならそれを処分する費用だけで済みますが、「中身の入ったペットボトル」を回収すれば、さらに、中身を検査する

ための費用が必要になります。そもそも、捨てなければ、回収にかかる労力も費用もゼロなのです。

5.私たちの思い

「成ヶ島でごみを拾おう。大阪湾の宝島の魅力とごみ問題という両面を知ってもらおう。自治体や地元の方々への負担を減らすために、ごみ処理にかかる費用はこちらで調達しよう。」私たちの思いをカタチにすべく、2019年8月に「瀬戸内オリーブ基金」宛に申請書類一式とともにプロジェクトチームの活動方針の資料を添えて助成金申請。同年11月に助成決定通知を受け取りました。

この助成金をごみ処理の費用として充てる旨を先方に説明をしました。が、最終的に、今回のツアーに関して費用負担は不要で、処分可能なゴミの回収（および分別）と指定された場所への運搬することと相成りました。

「お金よりも、この現状を知ってもらいたい。」洲本市と地元の方々から言われました。この言葉には、痛切な思いが込められています。成ヶ島のごみの大半を占める漂着ごみ、その回収のためにこれからもずっと地道な努力をし続けなければならない地元の方々にとって、唯一の根本的解決は「大阪湾に流れ出すごみをなくすること」に他なりません。

ウミウシ観察会は和歌山県和歌山市加太で、長松自然観察会は大阪府泉南郡岬町で開催しておりますが、そんなにごみは多くなく、観察会の際に釣り具や食品の包装ごみが目に付くといった印象でした。それが、実は大阪側で海に流れ出たごみが湾の向こう側である成ヶ島に漂着していて地元の方々の頭を悩ませているということ、たとえ今回費用を払ったとしても、20年余の活動の中ではほん

の一瞬、一過性に過ぎないということ、大阪側（＝ごみを出してしまう側）は問題としての認識が浸透していないこと…。短い言葉の中に語られる思いと現状の課題にやるせなさを感じ、今も胸に深く突き刺さっています。

ごみワークショップの振り返りでは、想像よりも少なかったという感想も多かったという意見もいただきました。相反するように思われるかもしれませんが、それぞれ「（ごみ拾いを続けているから）想像よりも少なかった。」「（20年以上もごみを拾い続けているのに）多かった。」と加えれば、納得がいきます。参加された方々には、当日説明しきれなかったことやアンケート結果を入れた「ふりかえりノート」をお送りする予定です。楽しい思い出とともに、今後に繋げていただけるように。

6.私たちができること

ごみ問題に関する人々の意識は年々高くなってきており、リデュース・リユース・リサイクルの3Rについて考えながら行動する人が増えつつありますので、ここでは「協会として私たちができること」について述べたいと思います。

海洋プラスチックごみを含め、ごみ問題について広める、啓発する、他団体と連携するなどといったアクションは、公益社団法人だからこそ実行可能で有効だと考えます。ツアーを計画して人を集めるにしてもSNSで発信するにしても、個人と公益社団法人とでは受け取り方も違うのではないのでしょうか。

team.虹鰓は、今後もNoペ割をはじめとする海洋プラスチックごみ問題の活動を続けていきます。協会内でも様々な活動が広がっていくことを願い、報告とさせていただきます。